

# ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書

## —— 古代学の源泉としての「メノロギオン」(1) ——

秋 山 学

### 第1節 「メノロギオン」

ギリシア・カトリック教会は<sup>1</sup>、ビザンティン典礼暦に従い「メノロギオン」(月課経)を用いている。この「メノロギオン」とは、9月より始まる年間の典礼暦の中で、1年366日(2月29日を含む)の日ごとに記念される各聖人をめぐり<sup>2</sup>、その生涯・活動・聖性の次第等を完結にまとめたものに、各日固有の祈祷文・唱句などを記載し収録したものである。ハンガリーのギリシア・カトリック教会では、10冊に分かたれた「メノロギオン」<sup>3</sup>を用いている。一方、各日ごとに固有の唱句をより完全なかたちで収めた集成は「メネア」と呼ばれ、ハンガリーのギリシア・カトリック教会の場合、修道院典礼に基づくギリシア語からの完全版が、2007年夏現在刊行途上にある(I:9月10月, II:11月12月, III:1月2月, IV:3月4月)<sup>4</sup>。既存祈祷書<sup>5</sup>への付録のかたちで普及している「メノロギオン」は、「メネア」が完結するまでの間、典礼執行上重要な役割を担っている。そればかりでなく、「メネア」に記載されていない各聖人の伝記部分は、単独で取り出してみても非常に興味深い古代中世の伝承を含んでいる。本稿は、この「メノロギオン」に載録された諸聖人を分類し、時代別に整理して、ギリシア・カトリック教会が伝える伝承の豊かさの一端を紹介することを試みるものであり、前・後2編に分かれる予定である。

ビザンティン典礼暦には、とくに殉教者への記念・崇敬が際立っている。これはこの暦が(ディオクレティアヌス帝期を中心に)古代後期・ローマ帝政期の歴史的記憶を担い続けることを意味し、古代学への視座を保証することにつながると考えられる。もっとも全2編より成る本論考の第1編(本編)では、旧・新約聖書に登場する人物に関する記念日を取り上げることとし、ローマ帝政期の殉教者たちへの記念を通して、この典礼暦が古代史学への視座を拓くことに関しては、本稿の続稿で改めて論ずる。

ところで本稿では、「メノロギオン」の記述が、さらにはいかなる外典等の典

拠に遡るのか、といった問題に関しては、あえて追究することを避けた。ギリシア・カトリック教会の信徒たちにとっては、それら外典等の文書よりも、カレンダーのかたちで「生きる」ことのできる典礼暦やそこに記載される聖人伝のほうが、より身近で血肉となるものだからである。また印刷ミスや誤字・誤った認識なども時に散見されるが、その考証についても他日を期すこととし、データの不正確さが目立とうとも現段階では責めない方針とした。本稿は、現行「メノロギオン」の訳出を主たる目的としている。

ビザンティン典礼における「聖人」の分類をめぐり、ここで概説しておく。これは順に 1 天使 2 使徒 3 仮愚者 4 司教たち 5 聖職殉教者 6 証聖者 7 奉仕医 8 預言者 9 隠修士 10 聖生師父 11 聖生殉教者 12 殉教者に分類され、女性の場合は A おとめ B 聖女 C 殉教女 D おとめ殉教者に分かれたる。日々の典礼における唱句は、このような分類を基礎にして定められている。本稿は、旧・新約聖書、古代史・中世史をひもとく際の手引きとして、ビザンティン典礼が極めて有効なものたりうるということを示そうとするものであり、以下、次の章立てで記述を進める。

1. 旧約書 ここには、預言者および天使が含まれる。
2. 福音書 ビザンティン典礼では、救い主イエスとその先駆者である洗礼者ヨハネ、そして救い主の母である聖母マリアを特に記念している。「使徒」という分類に含まれないそれ以外の人々も、ここに含めて考える。
3. 使徒 「使徒」のうちには、イエスの直弟子だけでなく、その2～3代後の者で、使徒的活動において目覚しかった者も含まれる。イエスの弟子として12使徒以外に特記される「70人の弟子」については稿末で考察する。
4. 帝政期ローマの殉教者たち 上述のように、この4. 以下に関しては稿を改めて考察する。なお古代末期の教皇や、東西教会分裂以前の聖人に関しても、ギリシア・カトリック教会の聖人暦に取り込まれている者が少なからず見出される。
5. ビザンティンの聖人たち 公会議・イコノクラスム・天災・コンスタンティノポリスの総司教などから、多くの聖人・出来事が取り上げられている。
6. 近世初頭の教会合同以降 ローマ・カトリック教会が、特に1962—65年の第2ヴァティカン公会議以降、積極的に近・現代の聖人たちをカレンダーに取り込んで記念するようになったのとは異なり、ビザンティン典礼教会に近・現代人が登場することは少ないが、それでもギリシア・カトリック関係の聖人たちが稀に加えられている。スラブやハンガリーの聖人なども登場する。

本稿では、上記分類のうちの前半部分、すなわち1. から3. すなわち聖書関係の聖人たちについて考察する。なお以下、聖人の読み方・呼び名に関しては、聖書中の読み方を考慮しつつ、ハンガリー風の呼び方も、初出の際に随時併記することにした。以下、「メノロギオン」本文からの訳出部は「」でくくるとし、筆者が適宜必要な訳注を附した。

## 第2節 旧約聖書

ではまず、旧約聖書関係の人物を、旧約諸書の順序に従って見てゆくことにしよう。彼らは「預言者」として分類される。

○アブラハム（アブラハム） 10月9日

「聖アブラハムはユダヤ民族の族長であり、大洪水の292—312年後、エウフラテス川下流の西岸にあるカルデアのウルに紀元前2167年ごろ生まれた。彼の父タレ（テラ）は、ノアの第3子であるセムの第8番目（聖ルカによれば第9番目）の子孫である。神はたびたび彼の忠実さと従順さを試み、彼がその試みを耐え抜いた後、イサクを息子として与え、彼の子孫から世の救い主が生まれるであろうと約束した。彼は175歳で亡くなり、エフロンの畑に葬られた」。

ここで「カルデアのウル」というアブラハムの故地は『創世記』11.28に見える。そして「聖ルカによれば」とあるのは『ルカ福音書』第3章末尾をさす。すなわちそこには、イエスの系図が遡る形で記されており、アブラハム⇒テラ⇒ナホル⇒セルゲ⇒レウ⇒ペレグ⇒エベル⇒シェラ⇒カイナム⇒アルパクシャド⇒セム⇒ノアとなる。一方『創世記』11.10～26によれば、上記のうちカイナムを除く者の名が挙がっている。

○モーゼ（モーゼシュ） 9月4日

「モーゼシュはイスラエル民族の指導者で律法家であり、紀元前1689年にエジプトに生まれた。130歳のころ約束の地の近くにあるネボ山で没した」。

○ヨシュア（ヨージェエ） 9月1日

「ヌンの子ヨージェエはユダヤ民族を率いる上でのモーゼの助手、ついで後継者であり、紀元前1541年ごろエジプトに生まれカナンの地、ティムナト・セラ（ヨシュア記24.30）にて1431年に没した。彼はユダヤ民族を約束の地に導いた。副官そして助手はゲデオンであり、彼はのちにユダヤ民族の士師となった」。

○サムエル（シャームエル） 8月20日 ※ただしハンガリーでは8月18日に

祝う。

「聖シャームエル預言者はエルカナとアンナの間に遅く生まれた息子である。ユダヤ民族の士師であり、すでに幼少期より予言の才を与えられていた。紀元前1155年ごろ生きた」。

○エリヤ（イッレシュ） 7月20日

「ギレアドの地、テスピに司祭の家系から生まれた。修道的な生活を送った。偶像崇拜に陥ったユダヤ民族の回心のために神が遣わした。彼のあらゆる尽力が徒勞に終わるや、彼自身も迫害されるようになったが、彼の祈りに応え、神は3年半の旱魃をもってユダヤ王国を疲弊させた。この時期が過ぎると、彼は神を信頼して王の前に偶像崇拜の祭司らを呼び出し、真の神が天から火を送って、彼の捧げる生贄を焼尽させることを彼らに認めさせようと試みた。実際、エリヤの祈りどおりに天から火が下り、イスラエルの民は真なる神に立ち返り、偶像は破壊され偶像崇拜の祭司たちは一掃された。彼は自らの外套と予言の能力をエリシャに委ね、火の車によってさらわれるまま、ヨルダン川の岸辺から天へと昇った。紀元前816年ごろのことである」。

○エリシャ（エリゼウシュ） 6月14日

「聖エリゼウシュ預言者はルベン族、アベル—ネウルの出身でサフエトの子である。紀元前908年ごろ預言者エリヤと関わった。エリヤは、天に挙げられる前に、その外套と預言者としての召命を彼に委ねた。それ以降エリゼウシュは紀元前832年まで預言者活動を行った」。〔※年代については原文のまま。〕

○ヨブ（ヨープ） 5月6日

「大いに苦難を被った正しき生の人、聖ヨープ。イサクの裔に生まれ、アブラハムにとって5番目の子孫である。両親はザレとボソツラで、アブラハムの孫の孫であった（マタイ1.3；創世38.30）。紀元前1925年に248歳で没した。アラビアのフスの地に生きた」。

○イザヤ（イザイアーシュ） 5月9日

「聖イザイアーシュ預言者は、アモスの子で、オゼアス王の時代に預言を始め、ヨアタム、アハズ、エゼキアの許でも継続した。紀元前681年、マナセ王のもとで殉教の死を遂げた」。

○エレミア（イエレミアーシュ） 5月1日

「レヴィ族の出でヘルキアスの子。ベニヤミンの地のアナトトで生まれた。紀元前613年から583年にかけて、30年間にわたって預言を行った。エジプトのタフナス近郊で石打ちにされ、そこに葬られた。彼の墓は長きにわたって巡礼地

となり、そこから持ち帰った塵で蛇のかみ傷が癒された。彼はセデキヤ王の時代、紀元前588年にバビロニア軍がエルサレムを占領したとき、契約の櫃を聖都よりひそかに持ち出し、敵勢の手に渡らないようにネボ山の洞穴に隠した人物である」。

○バルク（バルク） 9月28日

「ネリウスの子で、エレミア預言者の書記かつ弟子である。紀元前583年ごろ活動した」。

○エゼキエル（エゼキエル） 7月23日

「ブズィという名のユダヤ人の祭司の子で、イエコニア王の時代に多数のユダヤ人とともに、彼も捕虜としてバビロニアに連行された。捕囚の5年目、紀元前593年ごろに預言活動を始めた。ユダヤ人たちを支配するカルデア人たちにとって快からぬことを予言したために殺害された」。

○ダニエルと三人の若者；アナニア、アザリア、ミザエル（ダーニエル、アナニアーシュ、アザリアーシュ、ミザーエル） 12月17日

「すべてユダ族の出である。ダーニエルは紀元前606年ヨアキム王の治世3年目に、多数のユダヤ人とともにバビロンのナブコドノゾルの宮廷へと連行され、そこでボルディジャー（バルタザール）という名を得た。若き仲間たちはそれぞれシドラク、アブデナーゴ、ミジャクという名で呼ばれた。ダーニエルはペルシアの宮廷で高い地位の官職に就いたが、様々な理由から2度も獅子の穴に放り込まれた。二度目には6日間にわたって獅子どもと共にいたが、獅子は何ら危害を加えなかった。しかるに3人の若者は、ナブコドノゾルによって建てられた黄金の像を崇拝することを拒んだため、火のかまどに投げ込まれたが、神の奇跡的加護により、傷を受けることがなかった。ダーニエルは救い主の到来の時期をきわめて正確に予言した。彼は88年間生きた」。

○ホセア（オーゼアーシュ） 10月17日

「イサカル族の出身で父はベエリの子、ルステムであった。紀元前810年から720年の間に生き、預言者として60年にわたって活動した」。

○ヨエル（ヨエール） 10月19日

「ルベン族の出身でバトゥエルの子。紀元前810年から750年の間に生きた」。

○アモス（アーモス） 6月15日

「聖アモス預言者は、イザヤ預言者の父ザブロンの子で、テクアに生まれた。前半生は羊飼いであった。キリストの誕生する780年前ごろに生きた。金の子牛の偶像を铸造した廉で彼が批判した王の命により、アマズィアの下級司

祭に殺された」。

○オバデア（アブディアーシュ） 11月19日

「聖アブディアーシュ預言者は、アーカブ王の家臣であったが、王はイェザベル王妃の怒りの前に、100人の預言者をひとつの洞穴に閉じ込めてしまった。アブディアはエリヤ預言者の弟子で、紀元前903年ごろ予言活動を行った」。

○ヨナ（ヨーナーシュ） 9月21日

「聖ヨーナーシュ預言者はアマティの子で、ザブロン族からゲトウコフェルないしゲト・オフエルで生まれた。紀元前838年から810年の間に預言者活動を行った」。

○ミカ（ミケアーシュ） 1月5日，8月14日

「聖ミケアーシュ預言者は、紀元前759月8年から699月8年の間に予言を行った。ユダの地、モラスティテに生まれた。彼はメシアがベトレヘムに生まれねばならないことを予言した。イザヤ，ホセア，アモス預言者とともに、殉教の死を遂げた」。

○ナホム（ナーフム） 12月1日

「聖ナーフム預言者は、紀元前688年ごろに生きた。エルカナの子孫，シメオン族の出身である」。

○ハバクク（ハバクク） 12月2日

「聖ハバクク預言者は、紀元前470年ごろ生きた。シメオン族の出身である」。

○ゼファニア（ゾフォニアーシュ） 12月3日

「ゾフォニアーシュ預言者は、レヴィ族の生まれである。父はクジナという名であった。エゼキア王の時代，641年から610年の間に預言を行った」。

○ハガイ（アッゲウス） 12月16日

「聖アッゲウス預言者は、キリストに先立つこと470年ごろに生きた。バビロン捕囚ののち36年間にわたって預言者活動を行った」。

○ゼカリヤ（ザカリアーシュ） 2月8日

「紀元前516年から470年の間に預言者活動をおこなった」。

○マラキ（マラキアーシュ） 1月3日

「ユダヤ王ネヘミヤの時代に預言活動を始めた。旧約聖書における最後の預言者である。紀元前465年から424年の間に生きた」。

このほか、旧約聖書第二聖典の中から、マッカベウス家の若者が「殉教者」として記念されている。

○7人の聖なるマッカベウス家の殉教者たち、その母サロモナ、師のエレアーザール 8月1日

「7人の聖なるマッカベウス家の殉教者たち。その名は、アビム、アントニン、グリアス、エレアーザール、エウセボナス、エケイム、マルツェルであり、さらに彼らの母はサロモナ、師はエレアーザールであった。シリア王アンティオコス・エピファネスの時代に、旧約聖書の律法の刷新と、ユダヤ民族の独立のために戦った。紀元前166年ごろのことである。王は彼らを捕らえ、偶像崇拜に参加すること、豚肉を食すことを彼らに強要したが、彼らはむしろ、この命令を律法逸脱だとして死を選び取った。残虐な拷問の末、母親の目の前で7人の兄弟が処刑され、ついに母親も殉教者となった。紀元前166年のことである」。

また旧約・新約を通じて現れる「天使」についても、ここで紹介しよう。

○ガブリエル（ガーボル） 3月26日

「ガーボル大天使は神の伝令であり、神が何か喜びに満ちた業を明らかにしたいと望む際、われわれは常にその名に出会うことになる」。

○ミカエル（ミハーイ） 11月8日

「聖ミハーイ大天使と天のあらゆる力の記念。善き天使たちによる、ルチフェルとサタンに対する勝利の記念日。この記念日は、聖ミハーイを記念して多くの聖堂を建てさせたコンスタンティヌス大帝以来、われわれの教会で記念している」。

○主の親族 12月26日～31日の間の日曜日

これは、降誕祭にちなんでその翌日曜日を記念日とする「半移動祝日」であるが、ダヴィデが含まれるため、ここに紹介する。

「主イエスの肉における親族の記念。まずは聖ヨーゼフを、次いでダーヴィド王を、最後に年少の聖ヤーカブ使徒・エルサレムの初代司教がここに数えられる。聖ヨーゼフ、イエスの父は、ダーヴィド王の裔より生まれたエリであったが、レヴィラート婚の定めによればヤコブの家系に属した。ナザレトに住み、大工業を営んでいた。イエスの誕生後およそ30年間、この聖なる息子の養父であった。ダーヴィド王・預言者は、イザイもしくはイエッセの子で、ベトレヘムにて紀元前1085年に生まれ、1015年に70歳で没した。われわれの典礼には不可欠の部分である『詩篇』は彼の手に帰せられる」。

### 第3節 福音書

#### A 聖母マリア（マーリア）

ビザンティン典礼教会では、1年は9月より始まり、8月で終わる。この理解には、聖母マリアの誕生日が9月8日であり、聖母の逝去が8月15日であったことも反映されている。すなわちキリストを通しての人類の救いの歴史は、その母であるマリアの聖性より始まり、マリアの被昇天に終わらねばならない、とする神学がここに秘められている。正教会では行われることがなく、ギリシア・カトリック教会がローマ・カトリックから取り入れた「無原罪の聖母の御宿り」（誕生の9ヶ月前）の祝日も、この神学を背景に理解されよう。

#### ○無原罪の御宿り 12月8日

「いとも聖なるわれらの聖母、常世に処女なるマリアの原罪を免れし御宿り。われわれの教会の書物には、“聖アンナによる神の母の懐妊”という名で記念していた祝日が、12月9日に置かれていた。グレゴリウス暦使用のための移行（1916）に伴い、それ以降、ラテン典礼教会が今日を公的な祝日として祝っていることから、われわれもこの日にその記念を行うことになった。この記念日の目的は、処女聖マリアの特別性、すなわち神が贖いの行為を、母マリアの御宿りの瞬間から、原罪のうずきが彼女をまったく捕らえ得ないという仕方で証しした、という事実を記念することにある。かくして聖母は真の意味で“恩寵に満たされた者”となったのである」。

#### ○誕生 9月8日

「伝承によれば、聖母は紀元前16—17年ごろ、ユダ族すなわちダヴィデ王の家系に発するヨアーキムと、レヴィ族に属す祭司マツタンとその妻マリアの娘、アンナより生まれた」。

#### ○神殿奉獻 11月21日

「いとも聖なる神の母おとめマリアの神殿奉獻。伝承および外典福音書の記述によれば、聖ヨアーキムとアンナは、彼らの間に生まれてくる子供を神に献げるべし、というお告げを超自然的な仕方で受け取った。彼らはこれを果たし、おとめが3歳のときエルサレムの主祭司に献げた。こうして聖なるおとめは、その後14—15歳までエルサレムの神殿の聖域に仕えつつ育てられた後、聖ヨセフと義務的に婚約する運びとなった」。

#### ○受胎告知 3月25日

「おとめマリアへのお告げ。天使祝詞の記念日。聖母の懐妊。ギリシア教会

の計日によれば、世界創造以来（アダムから数えて）5499年目、おとめマリアがエルサレムでの神殿務めを終えてから4ヵ月後、聖ヨーゼフの婚約者として彼女がナザレトに赴いた折、大天使ガートルが彼女に、われらの救いの実現の始まりを意味する天からの接吻をもたらした。

○神の母の「神の母」性 12月26日

「この日は、マリアから、神の第2位格たるイエス・キリストが人として誕生したことによって、彼女が真に神の母であることを記念する日である。この記念には、聖家族がエジプトに逃避したことについて思い起こすことも含まれる」。

○被昇天 8月15日

「いとも聖なるわれらの聖母、栄光に満ち常世に処女なる神の母マリアの逝去と被昇天。幸いな方おとめマリア、聖ヨアキムと聖アンナの間にしみなく宿られた女性は、ダビッド王の裔であり、ヨアキムの晩年、結婚してから20年の後に、おそらくエルサレムにて生まれた（9月8日）。両親の誓いに従い、神に献げられた子供として、早くも3歳のおり、両親がエルサレムの主祭司に、神殿の勤めに励むおとめたちの中で育ててほしいと奉獻した（11月21日）。この聖なるおとめは、ユダヤ人の間ではまったく習慣に反して、処女性の誓いを立てた。しかしながら、旧約聖書の律法に記されている義務的な結婚に臨むよう強いられ、すでに40歳となっていた聖ヨーゼフと婚約した。

婚約期間中、神は大天使ガートルを彼女の許に遣わして、子なる神の受肉の知らせを告げさせた（3月25日）。これをおとめは、彼女の処女性が損なわれることはないということを理解した後、慎み深く受け入れた。聖ヨーゼフは、婚約者が身ごもっていることを知ると、ひそかに彼女を離縁しようと望んだが、天使の促しにより彼女との結婚を果たした。ベトレヘムで国民人口調査を待っているとき、世界の救い主が生まれた（12月25日）。生後ほんの数週間しか経っていない幼児のイエスをともない、聖母はヘロデの嫉妬を前にエジプトへ逃れねばならず、そこから後にナザレトに戻った。その後ほどなくして寡婦となったが、神の子が教えと救いの活動を続け完遂するまで、手仕事により糊口の糧を求めた。

イエスの十字架上での死後、使徒聖ヤーノシュが、すでに50歳代の半ばに差し掛かっていた神の母を引き取った。聖母は聖ヤーノシュとともに数年間エフェソスに、その後エルサレムに住み、そこで紀元後48年、63歳で亡くなった。

伝承によれば、神の子はその三日前、聖母に死の時を知らせていた。それが

過ぎると、聖母はオリーブ山、ゲトセマネの園のそばに掘った岩の墓場に葬られた。埋葬に際して、弟子たちは奇跡的な仕方で、雲に乗って様々な地方から集まってきた。ただタマーシュのみがそれに遅れた。タマーシュは3日が経った後ようやく到着したが、聖母になおもう一度遭うことが叶わなかったことに大層悲しんだため、使徒たちが墓を開いたところ、そこからは特別に芳しいバルサムの香りが立ちのぼった。しかしおとめマリアの棺は空っぽで、死者を覆う衣がその中に残っているだけであった。彼らがこれに呆然としている間に、天上より天使の歌声が彼らの耳に届き、彼らが上を見上げると、復活の肉体を伴って、天使たちによって天に挙げられた聖なるおとめの姿が見えた。

聖母の遺骸、いな棺とその衣服は篤信のキリスト教徒たちが幾世紀にもわたって保管していたが、その後マルキアヌス皇帝と后妃聖プルケリアがコンスタンティノポリスに運び、ブラヘルネの司教座聖堂に安置した」。

末尾の記載事項に関しては、7月2日および8月31日が記念日として当てられているが、これはすでにビザンティン時代の出来事に含まれるため、本稿の続稿に譲りたい。

## B 洗礼者ヨハネ（ヤーノシュ）

ビザンティン典礼教会に関しては、キリストよりも半年年長にあたる洗礼者ヨハネ（ルカ1.26；1.36）への崇敬も、その特徴の一つとしてあげることができるだろう。

### ○宿り 9月23日

「主の誉れ高く榮譽ある預言者にして先駆者、洗礼者ヤーノシュの宿り。キリストの誕生よりも15ヶ月先立ち、聖ルカ福音書から知られる天使の出現によるお告げがあった。これはユダヤ人の「仮庵の祭」期間中であった」。

### ○誕生 6月24日

「主の誉れ高く榮譽ある先駆者にして預言者、洗礼者聖ヤーノシュの誕生。ザカリアスとエルジェーベトの子。不妊と言われたエルジェーベトは、神の特別な恩寵により、老齢に及んでのち、救い主イエスの誕生の6ヶ月前にこの子を出産した」。

### ○斬首 8月29日

「洗礼者聖ヤーノシュは、ザカリアスとエルジェーベトの子で、両親の年齢が増してからその初子として生まれた。ベトレヘムでの聖なる夜から6ヶ月前のことである。エリザベトの懐妊に喜びを表すため、おとめマリアがエリザベ

トを親類として訪問した際に、彼は母の胎内にあってすでに原罪から清められた。若き頃、早くもヨルダン川沿いの荒れ野に赴き、まずは痛悔者としての自制的生活のうちに自らを完徳に至らしめ、罪の許しのための洗礼と、救い主の到来が近いことを告げ知らせ始めた。主イエスが30歳のころ彼から洗礼を受けるためにやって来ると、彼は神の命により、主イエスが約束された救い主であるということを明らかにした。すると彼の弟子たちが、次いですべての人々がイエスの群れに加わった。この後ほどなくして、大ヘロデの息子、ヘロデ・アンティパスに対して、弟のフェレプの妻と暮らすのはよくないと警告した。これに怒った悪しき女性ヘロディアスは、ある饗宴の席で、酒に酔ったヘロデに対し、娘のサロメを通して、彼女の巧みな踊りの褒賞として、ヤーノシュの首を要求させ、それをかち取った。斬首の日時は確かではないが、おそらくは復活祭に先立つ頃であったことが知られている。われらの教会が彼の斬首を記念し、同時に断食によってそれを悼む日は、実はこの聖なる首の二度目の発見の記念日である。それに対し、この二度目の発見については、最初の発見とあわせ、われわれの教会では2月24日に記念している。

○記念 1月7日

「洗礼者聖ヤーノシュの記念。信の神秘の記念日（降誕祭）と、おとめマリヤの生涯の出来事に続く日々、われわれの教会では、神の知恵が祝日の内容を表す出来事においてその役割を与えられた人間的ないし天使的人物について記念する。洗礼者聖ヤーノシュ自身も昨日祝われた啓示の出来事に与った者であった。彼は洗礼ないし神の現れを果たしたのち、人々の注目を言葉においても、世の罪の贖いのために来た「神の小羊」、イエスへと招いた」。

○首の第一、第二発見 2月24日

「洗礼者聖ヤーノシュの体は、監獄にて行われた斬首の後サマリアに運ばれ、そこで預言者エリシャとオバデアの傍に葬られた。その首は、ヘロデがサロメに、サロメはその母ヘロディアスに贈り、ヘロデの宮殿の中庭に埋められた。長い期間をおいて後、エルサレムへ巡礼に向かう二人の篤信の修道士に、聖ヤーノシュ自らが姿を現し、自分の首が埋められている場所を示した。その指示に従うと、聖人の首は実際にそこにあった。遺骸はその後シリアのエメサに移されたが、時代の変遷のうちに再びその場所は不明となった。430年から460年の間に2度目の発見があった。今日の記念はこれら二度の発見を祝うものであるが、二度目の発見の日は、伝承によれば8月29日とされており、この日をわれわれは斬首の記念日としている。斬首の日は知られていない。ただわれわれ

が知りえていることは、それが復活祭の前ごろに行われたということだけである。エメサで発見された遺骸はコンスタンティナポリに、次いで後にローマへと運ばれた」。

○首の第三発見 5月25日

「カッパドキアのクマナにて、聖イグナティオス総司教が、失われた聖人の遺骸を867年、3度目に発見し、ミハーイ皇帝とテオドゾイア后妃の時代にコンスタンティナポリに移送した」。

C イエス・キリスト（イエズシュ・クリストウシュ）

イエス・キリストをめぐる神秘の核心、すなわち受難・死・復活・昇天そして使徒たちへの聖霊降臨、といった一連の記念日に関しては、もとより復活祭が陰暦にかかわるため年によって移動する祝日となり、「メノロギオン」には現れない。したがって「メノロギオン」だけをもって十全にキリストの生涯に接することは不可能である。この「メノロギオン」に載るカレンダー上の記念日に関しても、記載が省略される傾向にある。ここでは「典礼カレンダー」<sup>6</sup>あるいは、典礼学関係書目<sup>7</sup>から補って訳出する。

○降誕 12月25日

「われらの主そして神、救い主イエス・キリストの肉における誕生。世界の創造から数えると、ギリシア教会の計日では5508年目、ローマ教会の計日では5199年目、大洪水から数えて2957年目、アブラハムの誕生から2015年目、イスラエル民族のエジプトからの脱出の後1510年目、ダヴィド王への塗油から1302年目、ダニエルの預言によれば65番目の7年期（ダニエル9.24参照）、第194オリュンピア期、ローマ建国後752年目、アウグストゥス・オクタウィアヌスによる治世の42年目、世界の第6期すなわち全地球に平和が訪れる時期に、イエス・キリスト、永遠なる神にして永遠なる父の子が、預言によって世界を聖化することを望み、聖霊によって宿り、宿りから9ヶ月が満ちた折にユダヤのベトレヘムにておとめマリアより人となった（ローマ殉教者伝）。

この記念日は、古くは主の洗礼の祝日とともに1月6日にわれわれの教会では記念していた。12月25日の祝賀は、西方では354年ごろに起源を有し、東方では376—380年ごろ慣習化した。この同じ日に、ギリシア教会では東方の博士たちがイエスの前に現れたことを記念する」。

○神殿奉献 2月2日

「われらの主にして神、救い主なるイエス・キリストのシメオンとの出会い。

キリストの神殿奉献。この日には、イエスが旧約の律法の掟に従い、生後40日目に、初子ゆえの贖いのいけにえとして、エルサレムの神殿に捧げられたことを記念する。神殿では年老いたシメオンが彼を迎えた。シメオンは聖霊により、救い主を目にするまでは死ぬことがないという啓示を受けていた。エルサレムにて4世紀に定められた、もっとも古い祝日の一つ (Iv)。

○割礼 1月1日

「教会は4世紀以降、イエスが旧約聖書の律法に自ら従い割礼を受けたことを記念してきた。この日は、天使が前もって告知らせていた名を彼が受けた日であり、この日はイエスの名の日でもある (Iv)」。

○洗礼と公現 1月6日

「イエスが洗礼を受けた日。三位一体が完全な形で人々の前に現れた (cf. マタイ 3.16-17)。東方での最も古いキリスト教の祝日で、2世紀にさかのぼる。西方では3世紀にこれを受け取った (Npt.)。ビザンティン典礼教会では祝日の典礼の後「水の祝福」が行われる。可能な場所では、川の水にてこの祝福が行われる。これはイエスがヨルダン川で洗礼を受けたことの記念である (Iv)」。

○変容 8月6日

「われらの主にして神、救い主なるイエス・キリストの聖なる変容。この日は、福音書に記されているように、選ばれた弟子たち (ペーテル、ヤーカブ、ヤーノシュ) の前で、タボル山上においてイエスがその色と姿を変え、自らの意志による受難の意味を彼らが理解するよう、神性の栄光を明らかにしたことを記念する (Iv)」。

D その他福音書に現れる人物 (使徒を除く)

○ザカリアス (ザカリアーシュ) 9月5日

「聖ザカリアーシュ預言者、洗礼者ヤーノシュの父親。アレクサンドリアのペトルスによれば、彼はバラキアスの子で、ユダヤ人たちが神殿と祭壇の間で殺害したザカリアスと同じであるという (マタイ 23.35)。彼は、わが子をベトレヘムでの迫害の際にエルジェーベトとともに荒れ野に隠し、マリアを出産の後も処女であると言ったと言われる」。

○ヨアキムとアンナ (ヨアーキム、アンナ) 9月9日 ⇒ 9月8日、および次項参照。

○聖アンナ 12月9日 および 7月25日

《12月9日》「聖アンナの記念。聖ヨアーキムとアンナは、20年におよぶ結婚生活にもかかわらず子供に恵まれなかったため、イザカル主祭司はエルサレムの神殿奉献記念祭の際に、「子に恵まれるに相応しいと神が認めないものは、大いなる罪びとである」という通念が広まっていたことに基づき、彼らの犠牲の捧げものを返納した。ヨアーキムはそのため身を隠し、アンナはナザレトにこもった。身を隠したヨアーキムに、荒野で天使が現れ、アンナには神のはからいにより女子が生まれるであろうこと、彼女はマリアと呼ばれ、すでに懐妊の時点から聖霊によって満たされているということを理解させた。しるしとして天使は、直ちにエルサレムに行くよう命じ、神殿の門のところで、感謝の念を捧げに急いできたアンナに出会うであろうことを告げた。そのとおりになった。聖ヨアーキムとアンナには、伝承によると、当時すでにエルサレムに住まいがあり、単に奉納物を戻されたゆえの恥が彼らをナザレに赴かせたのであった。エルサレムで、彼らの家が合った場所には、新たに無原罪の御宿りの聖堂が建っている。

この記念日は、東方教会では古代より祝われていた（朝の詩篇カーノンにクレタの聖アンドラーシュが編んだ）。1747年に出版された古代スラブ語の典書ではすでに8日に祝うように定めている。ラテン典礼教会は11世紀にわれらから伝承を受け継ぎ、1708年以降12月8日を記念日とするよう定めた。

《7月25日》「聖アンナ、いとも聖なる聖母の母親の逝去。聖アンナの父親は、ダビッドの裔なるガルザリウス、母はエメレンツィアであった。ベトレヘムに生まれ、ヘリアーキム、別の名をヨアーキムという、ナザレトの出身でやはり同じ家系に属す若者に嫁いだ。20年におよぶ婚姻生活ののち、聖なるおとめを結婚の実りとして得た。ヨアーキムの死後、なお2度にわたり嫁いだが、36歳のときにこの聖なる女性は寡婦となった。二度目の夫はクレオファで、彼は聖ヨージェフの弟とされている。三度目の夫はサルモンであった。クレオファからもサルモンからも、一人ずつ、いずれもマリアという名の娘をもうけた。クレオファの娘はアルフェウスの妻となった。彼らの子供としては、初代エルサレム司教で典礼を制定した年少の聖ヤーカブ、さらにはユダ・タデ、カナのシモン（彼の結婚披露宴の場でイエスによる最初の奇跡が起きた）、さらにはヨージェフ・バルザバがいる。バルザバはイエスの昇天ののち使徒と称されたが、くじ引きの結果、彼ではなくマーチャーシュが補充された（使徒1.23）。一方、サルモンから生まれたマリアという娘はゼベデウスに嫁ぎ、彼らからは聖ヤーノシュと年長の聖ヤーカブ使徒が生まれた。伝承によれば、聖アンナ

は神の子である孫にまだ会うことが叶い、キリストの生誕ののち、3年ごろ69歳で亡くなった」。

○シメオンとアンナ(シメオン, アンナ ※聖母の母アンナとは別人, ルカ 2.36 参照) 2月3日

「聖シメオンはユダヤ人の書記の一人であった。ヘゲシッポスの覚え書によると、シメオンは「おとめに子供が生まれる」ということを不審に思い、イザヤ預言者の予言書のなかのある記号を変えることにより、われわれの言語で「若い花嫁」を意味するヘブライ語の語彙に書き改めた。彼はこれを3度行ったが、その都度、驚くべきことに、翌日には必ず元来の本文に戻っているということを経験した。かくして彼は、神がこの次第を明らかにしてくれるようにお願いすると、聖霊の示唆により、この予言が成就するのを己が眼で見るまでは、自分は死ぬことはない、ということを知った。イエスの神殿奉獻の日、老人はやはり聖霊に促されて神殿にやってきた。救い主との出会いの後、程なくして彼は亡くなった。ある典書によれば彼は370年生きたという。かくして彼は預言者たちと救いの時代の生きた架け橋となった。

聖アンナはアシエル族の出身、ファヌエルの娘であった。キリストとの出会いのときすでに84歳で、自らを神に献げた寡婦として神殿に仕える身であった。伝承によれば、彼女は神殿で育てられるべく預けられたおとめマリアの育て親であった」。

○ヨセフ(ヨージェフ) 3月19日

3月19日には“イタリアのギリシア・カトリック教会で祝う”と断り書きがなされた上で、次のような記載がある。

「聖ヨージェフ証聖者。いとも聖なる神の母の婚約者にして、われらの主イエス・キリストの養父。母なる聖カトリック教会の天における庇護者。イスラエルの民、ユダ族、ダーヴィド王の家系に紀元前43年ごろ生まれた。父親はエリ(ルカ 3.26)という名であったが、ユダヤの民族法に定められたレヴィラート婚制度に基づき、エリの親類であるヤーコブの家系に属することになった(マタイ 1.16)。4歳のときに、やはりユダヤの民族法の取決めに従い、おとめマリアと義務的婚姻を交わし、彼女とほぼ30年間にわたり、いとも聖なる家族関係のうちに、染みなく完徳に基づいた自制的な生活を送った。聖書では「正しき人」と呼ばれている。キリストが公に宣教活動を始める前、紀元前25—26年ごろ亡くなった。われわれの教会での公的な記念はきわめて古くに遡り、降誕祭の翌日曜日、主イエスとこの世で近い親族関係にあった人々の記念とともに

執り行われる。ラテン典礼教会では、11世紀より熱心な崇敬が始まった。1870年、教皇ピウス9世が「母なる聖カトリック教会の天における庇護者」に選んだ。彼の記念は、ポーランドのギリシア・カトリック教会では12月26日に、神の母のための記念とあわせて執り行われる」。

○幼子殉教者 12月29日

「ベトレヘムでヘロデにより虐殺された14000人の聖なる幼子たちを記念する」(マタイ2.16以下参照)。

○マリア・マグダレナ (マリア・マグドルナ) 7月22日

「香油を携える聖なる女性、使徒の同志マリア・マグドルナ。ガリレアの湖のそば、マグダラに生まれた。イエスが、彼女に取り付けていた7つの悪霊から彼女を解放したのち、弟子たちを支え、どこであれイエスと行動を共にした。十字架刑のときにもその場を離れることはせず、遠くから始終この出来事を見守っていた。聖金曜日には彼女も主の埋葬に助力した。そして復活の明朝、金曜の夕刻にはほんの表面的にしかなされていなかった塗油を、仲間の女性たちとともに丁重に執り行うため、真っ先に墓へと急いだ。彼女の大きい愛慕への報奨は、救い主が復活の後、ゲトセマネの園で彼女のまえに、まず最初に姿を現したことである。イエスの昇天の後、彼女も使徒たちを助けて福音の宣教に力を尽くし、信仰の宣べ伝え手として、エフェソスにてその生涯を終えた。西方の聖人伝ではマルタおよびラーザルの姉、それにイエスが立ち直らせた罪ある女と同一の人物だとされているが、ギリシア教会では、名前が同じであるとはいえ、これら3人を別々の人物だとしている」。

○ロンギノス百人隊長殉教者 (ロンギン) 10月16日

「カッパドキアの生まれでローマ軍の軍人。ピラトは彼をイエスの十字架刑のおりにゴルゴタに派遣していた。イエスの受難と死の目撃証人となり、自然界の震撼を目にしたとき、彼自らも霊的に震撼しイエスの神性について証言した。救い主の復活ののち軍の職を辞し、郷里に帰り、後に洗礼を受けて自らもキリスト教信仰を述べ伝え始めた。それゆえピラトによって捕らえられ、カイサリアのティベリウス帝の前へと引き出されて、そこで処刑された」。

#### 第4節 「使徒行録」

では次に「使徒行録」に現れる人物を考察しよう。ビザンティン教会では、イエスの弟子たち、ないし初代教会時代に活躍した人物を「使徒」の名で総称

する習慣がある。本稿では「使徒行録」後半ではパウロが主たる登場人物となることにかんがみ、パウロの活動を年譜化し、彼の書簡の執筆年代を定めたいうで、その執筆年代に基づいて書簡を「使徒行録」に沿って配し、書簡類に現れる「使徒」たちについてもここで一括して「メノロギオン」から紹介することにしたいと考える。そして最後に、これら初代教会の活動にあって実質的に大きな礎石となったと考えられる「イエスの70弟子」について考察する。

まず「使徒行録」について、以下箇条書きで各章の内容を記述し、その全体像を捉えておくことにしよう<sup>8</sup>。

① 1. 1—5. 42 原始教会の成立

1) 1. 1—14新しい歩み；2) 1. 15—26マツテアの選出；3) 2. 1—13ペンテコステの出来事；4) 2. 14—36聖霊降臨の意義；5) 2. 37—42悔い改めた人々；6) 2. 43—47原始教会の生活；7) 3. 1—10美しの門にて；8) 3. 11—26ペトロの説教；9) 4. 1—31大胆な証言；10) 4. 32—5. 11アナニヤとサツピラ；11) 5. 12—32神に従う使徒たち；12) 5. 33—42ガマリエルの進言

② 6. 1—12. 25 教会の迫害とエルサレム以外への宣教活動

13) 6. 1—7 助祭の選出；14) 6. 8—7. 60たたかうステファノとその殉教；15) 8. 1—3 迫害者サウロ；16) 8. 4—25フィリポのサマリア伝道；17) 8. 26—40エチオピア人の受洗；18) 9. 1—9 サウロの回心；19) 9. 10—19 アナニヤとパウロ；20) 9. 19—30宣教者として立つパウロ；21) 9. 31—43ルダとヨツバの伝道；22) 10. 1—11. 18コルネリオの回心；23) 11. 19—30教会の発展；24) 12. 1—25この世の権力をこえて

③ 13. 1—15. 35 パウロの第1次宣教旅行とエルサレム使徒会議

25) 13. 1—3 出発・外国へ；26) 13. 4—12キプロス島；27) 13. 13—14. 7ユダヤ人との衝突；28) 14. 8—18ルステラにて；29) 14. 19—28第1次宣教旅行からの帰還；30) 15. 1—35エルサレム会議

④ 15. 36—18. 17 パウロの第2次宣教旅行

31) 15. 36—41第2次宣教旅行に出発；32) 16. 1—10再び小アジアへ；33) 16. 11—40フィリピの町にて；34) 17. 1—15テサロニケからベレアへ；35) 17. 16—34アレオパゴスにおける演説；36) 18. 1—17コリント教会の設立

⑤ 18. 23—21. 14 パウロの第3次宣教旅行

37) 18. 18—28雄弁なアポロ；38) 19. 1—20迷信の打破；39) 19. 21—41エフェソの騒乱；40) 20. 1—12ギリシアからトロアスへ；41) 20. 13—38ミレト

スでの別れ；42) 21. 1—14カイサリヤ

⑥21. 15—28. 31 最後のローマへの旅

43) 21. 15—26エルサレム入り；44) 21. 27—22. 29捕えられたパウロ；45) 22. 30—23. 35パウロ暗殺計画；46) 24. 1—27総督フェリクスの審問；47) 25. 1—12ローマへの道；48) 25. 13—27フェストゥスとアグリッパ王；49) 26. 1—32福音を恥としない；50) 27. 1—45地中海を横切って；51) 28. 1—10マルタ島；52) 28. 11—15ローマの土；53) 28. 16—31希望と喜びの囚人生活

本稿では以下、「使徒行録」中で言及される人物がビザンティン典礼暦で記念されている場合を取り上げ、旧約あるいは福音書関係の場合と同じく「メノロギオン」の記載事項を訳出することにする。その際「使徒行録」中での言及箇所に関して、上記1) から53) の分類番号を冒頭に冠する。

1) 「使徒行録」1. 13には、一二使徒の名が列挙されている。

○聖なる12使徒 6月30日

「主の12人の使徒。ペーテル、元来はシモン、およびその兄弟アンドラーシュ、彼は最初に召命を受けた人物である。ゼベデウスの子ヤーカブ、およびその弟ヤーノシュ、彼を主イエスは誰よりも愛した。彼は第4福音書の記者である。フリュプおよびベルタラン（もとはナーターン）、彼らもやはり兄弟である。タマーシュとマーテー（アルファイの子）、彼は以前レーヴィと呼ばれていた。年少の聖ヤーカブの兄弟である。アルフェウスの子ヤーカブと、別の名をタデというユダ、彼らは親類である。カナのシモンとマーチャーシュ、彼は裏切り者のユダの代わりに主の昇天と聖霊降臨の間の期間に選ばれ、召された者である」。

○ペトロ（ペーテル）（「ペトロとパウロ」として6月29日に記念）

「聖ペーテル使徒はベトサイダの生まれである。彼の父はヨーナシュないしヤーノシュ（ヨハナン、ヨナ）と呼ばれる一方、彼の名は元来シモンであった。ケファスもしくはペーテルという名は、イエスが使徒職に招いたときに得た名である。主イエスは彼を使徒たちの頭とした。主の昇天と聖霊の降臨ののち、彼はエルサレムで福音の宣教を始め、神殿の扉のところで物乞いをしていた足の不自由な男を癒し、福音宣教が真理であることを確証する最初の奇跡を行った。使徒たちが各地に散った後、アンティオキアに赴き、そこに7年間留まり、ついでアジアのさまざまな場所を巡り、ローマに居を定め、そこから、初代の時期を生きる教会の諸事万般を、第一の者たちの第一の者として指導したが、

ネロによって始められたキリスト教迫害が、67年6月29日、彼に殉教の栄冠をもたらした。十字架刑に定められたが、彼は、救い主と同じ姿で受難を迎えるに自分は値しないという理由で、頭を下にして十字架につけるように要求した。そのように執り行われた」。

○ヨハネ（ヤーノシュ） 9月26日 および 5月8日

《9月26日》「神学者聖ヤーノシュ福音記者は、ゼベデウスとサロメの子であり、大ヤーカブの弟で、ガリラヤのベトサイダに生まれた。漁師から使徒となり、十字架の足もとまでイエスの傍らに留まった。救い主は聖母の世話を彼に委ねた。聖母の死までエルサレムに住み、その後小アジア、主としてエフェソスにて福音を告げ知らせた。96年、ドミティアヌス帝による第2次キリスト教大迫害の際、ローマに連行されそこで煮えたぎる油を満たした桶に入れられたが、まったく傷を負わなかった（5月8日）。そこでパトモス島に流されたが、後にここからエフェソスに戻って第4福音書を書き記し、100歳を越えた頃平和裡に亡くなった。「神学者」の名で呼ばれるのは主として、神の御言葉が、永遠の昔より父から生まれたことを告げ知らせたためである」。

《5月8日》「聖ヤーノシュの生涯については、彼が没した日である9月26日に読む。今日は、ギリシア教会の典書によれば「マンナ」の記念日と呼ばれる。これはこの季節に、エフェソスにあった聖人の墓に信徒たちが大挙して押しかけ、そこから癒しの力を持つ木の実を集め、その実が「マンナ」と呼ばれたことによる。ラテン典礼教会では5月6日に、聖ヤーノシュがエフェソスからローマに連行され、通称「ラテン門」と呼ばれた場所の前でドミティアヌス帝の命により煮えたぎる油に潰けられた際、何の被害を蒙ることもなくそこから脱したという出来事を記念している。おそらくこの出来事は、マンナと関係づけられたエフェソス巡礼の際にも記念されたと思われる」。

○ヤコブ（ヤーカブ） 4月30日

「聖ヤーカブ使徒、神学者聖ヤーノシュの兄弟は、12人の弟子の一人であり、彼をラテン教会では「大ヤーカブ」という名で記念している。ゼベデウスの子であり、その兄弟ヤーノシュとともに主イエスは「ボアネルゲス」すなわち「雷の子」と名づけた。43年の復活祭の前に捕らえられ、ヘロデス・アグリッパがユダヤ人たちの歓心を買うために処刑した」。

○アンドレ（アンドラーシュ） 11月30日

「聖アンドラーシュ使徒は、聖ペートルの兄であり、ガリラヤのベトサイダの生まれである。父はヨナシュないしヤーノシュと呼ばれた。初めは洗礼者聖

ヤーノシュの弟子であったが、次いでイエスと関わりを持ち、12人の弟子のひとりとなった。救い主の昇天ののち、ヨーロッパの南・東部、伝承によればロシアの南部でも福音を告げ知らせ、ついにX字状の十字架に懸けられ、アカシアのパトラスにて62年、殉教の栄光をかち取った」。

○フィリポ（フェルユブ） 11月14日

「きょう記念する聖フェルユブ使徒は、12人の弟子の一人である。ガリラヤのベトサイダの生まれで、アンドラーシュ及びペーテルと同じ地の出身である。彼はイエスの許に聖ナタナエルを連れて行った。このベルタランも12人の弟子の一人となった。彼の偉大な宣教者としての活動は、小アジアの教会の数的増加と力の増大が証明している。フリギアのヒエラポリスにて斬首に遭い、殉教の栄冠をかち取った」。

○トマス（タマーシュ） 10月6日

「聖タマーシュ使徒は、添え名をディデュモス（双子）という。生まれはガリラヤで、12人の弟子の一人である。イエスの復活に関する彼の信仰は、彼自身の手で主の聖なる体と釘穴に触れたときによく完全なものとなった。聖母の埋葬の際には遅れて到着し、聖母への敬愛の念から、聖母の体を包んでいた葬衣が解かれた。こうしてそのとき使徒たちは聖母の昇天の証人となりえた。使徒たちの離散ののち、バルティア、メディア、ペルシア、ヒルカニア、バラマン族の間で信仰の宣教に従事し、全前インド地方にまで赴いた。あるヒンドゥー族の王の命により、槍で突き刺され、コロマンデル地方、ガンジス川の岸辺にあるカラミナという町（後のメリアブルないしマリヤブル）にて殉教の死を遂げた。のちにその遺骸はエデッサ、次いでアプリアのオルトンへと移送された。彼の使徒的活動の成果として、これらの地方の司教も第1回普遍公会議に出席した。後に彼らの普遍教会との関係は何世紀にもわたって分かたれたが、その信仰は守り抜かれた。彼らの今日の継承者はシリア・マラバル典礼に従っている。これらはいわゆる「トマス・キリスト教徒」である」。

○バルトロマイ（ベルタラン） 6月11日

「聖ベルタランは12人の使徒の一人で、元来の名はナタナエル、ガリラヤの生まれであった。使徒たちの離散の後、アラビア、ペルシア、そしてインドに宣教に赴いた。アルメニアのアルバノポリスにて十字架に付けられ、その生涯を終えた」。

○マタイ（マーテー） 11月16日

「聖マーテー使徒福音記者は、元来レヴィと呼ばれ、アルフェウスの子で、

年少の聖ヤーカブの兄弟であった。生まれはガリラヤで、職業は徴税人であった。福音書を主の昇天の8～10年後に記した。12人の使徒の一人である。45年ごろエジプトに赴き、当地にて23年間にわたり福音を告げ知らせ、ついに90年、殉教の栄冠をかち取った」。

○アルファイの子ヤコブ 10月9日

「聖ヤーカブ、アルフェウスの子は、聖マタイ使徒福音記者の兄弟で、主の12人の弟子の一人である。使徒たちの離散の後、実に多くの地方を巡り、多くの民を回心へと導き、その熱意のゆえに十字架上での死を遂げた」。

○熱心党のシモン 5月10日

「カナの生まれで、12人の弟子の一人である。伝承によれば、主イエスは彼の家の高間にて最初の奇跡を行ったとのことである」。

○ヤコブの子ユダ（ユーダーシュ） 6月19日

「聖ユダ使徒は、タデとも、レヴィとも、ゼーローテースとも呼ばれた。12人の弟子の一人である。聖ヨージェフの兄弟であるクレオファの息子であり、エルサレムの初代司教聖ヤーカブの実の兄弟、すなわち主の従兄弟であった。メソポタミア、アラビア、イドゥメア、シリアで使徒的活動を行った。ペリュッサにて80年ごろ殉教の死を遂げた」。

以下、マッテアを含む他の「使徒」たちを紹介する。

2) ○マッテア（1.24, 26）（マーチャーシュ） 8月9日

「聖マーチャーシュ使徒。72人の弟子のひとりであった。イエスの昇天の後、裏切り者のユダの代わりに12弟子の一人として選出された。エチオピアにて福音を述べ伝え、殉教の死を遂げた」。

10) ○バルナバ（4.36；11.22；15.37）（バルナバーシュ） 6月11日

「ガマリエルの学校でパールと同窓、ついで72人の弟子の一人。キュプロス生まれでユダヤ系、レヴィ族に属す家系の出である。最初はヨセフと呼ばれた。パールの同行者として多くの土地で福音を告げ知らせたが、結局51年ごろ郷里にて石打ちに遭い、サラミナにて殉教の栄冠を勝ち取った。その遺骸はゼノン皇帝の頃476年にマタイ福音書の写本とともに発見された。それはバルナバの自筆により写されたものであった」。

13) ○7助祭（6.5；プロコロ、ニカノル、ティモン、バルメナおよびステファノ、フィリポ） 7月28日

「イシュトヴァーンとフェルユプも、最初に選ばれた7人の助祭のうちである。そのうちニコラオスだけがその名を挙げられていないのは、彼がニコライ

派の異端に走ったからである」。

14) ○ステファノ（6.8—7.60）（イシュトヴァーン） 最初の殉教者 12月27日

「聖イシュトヴァーン、主助祭、最初の殉教者。ガマリエルの弟子、生まれはユダヤ人である。使徒たちが選んだ7人の助祭のうちの一で、熱心な奉仕者かつも言葉の伝え手であるだけでなく、同時に真理を奇跡で確かなものとする、初代教会の一員であった。36年に殉教する。処罰が完遂されたとき、若きサウロ（後のパウル）は人々の衣服を預かった。サウロはこの同じ年に回心することになる」。

16) ○フィリポ（8.5—6；26—40；21.8）（フェルユブ） 10月11日

「聖フェルユブは7助祭の一人。パレスティナのカイサリアに生まれ、35年ごろサマリアで教える。彼は、旅の途中でイザヤ預言者の預言書を読んでいたエチオピアの後妃の高官に洗礼を授けた。後にアジアのトラッレスの司教となり、同地にて死去」。

## 第5節 パウロ(1)

「使徒行録」後半部の主人公となる使徒パウロは、紀元後1年頃キリキアのタルソスに生まれ、15年頃エルサレムに赴き、ラビの学校に学ぶ。それとともに天幕作りの技をも身につけている。34年から36年にかけて、熱心なユダヤ教徒としての立場からキリスト教徒迫害に関与するが、ダマスコにて回心し、アナニアより受洗する。「使徒行録」のパウロは、信徒迫害に加わるその姿から描かれ始める（7.58；8.1）。

18) ○パウロ（パウル）（「ペトロとパウロ」として6月29日に記念）

「聖パウルは元来サウロという名で、ベニヤミン族というユダヤの一族の出で、キリキア地方のタルソスに生まれた。彼の父はローマ市民権を持つファリサイ派であった。パウルは聖バルナバ（おそらく彼の親類であった）とともに、著名な律法学者であるガマリエルの下で学び、古来の律法とユダヤの伝統の最も煩瑣な点にまであまりに固執していた。かくしてキリスト教に対してはすでに初めから敵対し、機会を得るや迫害者となった。ダマスコスに向かう偵察の途上、神が奇跡的な仕方であつて彼を使徒職に招いた。72人の弟子たちの一人、アナニアがダマスコスにて彼に洗礼を授けた。パウルは12人の弟子とはほとんど接触を持たず、彼らのうち個人的に知っているのはペーテル、それを除けば、主

の兄弟でエルサレムの初代司教のヤーカブのみであった。書簡のうちに書き留められている教えは、個人的な霊的体験の途上、回心ののちアラビアに引きこもって生活した折におそらく得たものであろう。当時知られていた世界の大部分、すなわちペルシアからスペインまでを旅行し、3度におよぶ使徒的大旅行により実に多くの教会共同体を組織し、司教を建てた。そのなかには、主の72人の弟子たちに含まれるものもあれば、個々の土地の学者ないし篤信の若者から選んだ場合もある。キュプロスの総督セルギウスは、キリスト教徒となるに際して、嬉しさからパールという名を選び取った。ローマに移住し、ネロ皇帝の友人であるセネカと親交を結び、皇帝家からもキリストのために多くをかり得た。ついに彼もまた死罪に定められ、聖ペートルと共にある日死刑を執行されたが、ローマ市民権を有しているために十字架刑ではなく、斬首による刑であった」。

19) ○アナニア (9. 1—19, 22. 12—26) (アナニアーシュ) 10月1日

「聖アナニアーシュは主の72人の弟子の一人に数えられる。イエスの昇天ののちダマスコにて教え、当地にて神のお告げにより36年に迫害者から奇跡的に回心したサウロにも洗礼を授けた。ローマ提督ルキアノスの命により捕らえられ、殉教の死を遂げた」。

22) ○コルネリオ (10. 1, 22, 31) (コルネール, 百人隊長) 9月13日

「聖コルネール百人隊長はパレスティナのカイサリアに住み、キリストの教えに惹かれたのち、聖ペートルがその家人とともに41年洗礼を授けた。彼は教会に入った最初の異教徒である。後に軍を辞し、カイサリアついでトロアスの司教となり、同地にて信仰のゆえに殉教した」。

24) ○ペトロの鎖 (12. 6 ; 43/44年) 1月16日

「テオドシウス2世皇帝の妃エウドキアは、437年にエルサレムに巡礼旅行を行った折、総主教ユヴェナリスより、聖ペートルが43年、使徒たちに対する最初の迫害の際、エルサレムの牢獄につながれていたときの鎖の一部を受け取った。彼女はこの鎖の一部を、エウドクシアという少女に託してローマに送った。一方別の一部は、ワレンティニアヌス皇帝が妃のために、コンスタンティノポリスへと持ち帰った。今日はその記念日である」。

○マルコ (12. 12) (マルク) 4月25日

「リュビアのペンタポリスの生まれで、出自は異教徒である。エルサレムに移住し、イエスの教えを心から聞く者たちの一人となったが、公には関係を持たなかった。伝承によれば、当初はヤーノシュと呼ばれ、彼の家にて晩餐が行

われていたおり、イエスがタマーシュに現れ、使徒たちが聖霊を受けた。ペーテルとともに後に彼もローマに赴き、ここで福音書を記した。74年に殉教する」。○ヤコブ（12.17）（ヤーカブ）「主の兄弟」 10月23日

「聖ヤーカブ使徒、主の兄弟（アデルフォテオス）。アデルフォテオスとはギリシア語で「神の兄弟」を意味する。この名は、あるものによれば、聖ヨーゼフが聖母と婚約する前にヨーゼフの妻であったある女性との間の子である、ということからつけられた名である。しかし別の説によれば、聖ヨーゼフの兄弟であるクレオファないしクロヤの孫で、その父はアルフェウス、母は聖アンナにとって二番目の、しかしやはりマリアという名の娘であった。かくしてこの説によれば、彼は主にとって従兄弟となるが、単に東方の民族的習慣により、この書でも「主の兄弟」と呼んでいる。しかしアルフェウスの子だとは考えず、聖ヤーノシュの兄弟とも、聖マタイの兄弟とも区別する者が多くある。われらの教会はこれに従い、年長の聖ヤーカブすなわち聖ヤーノシュの兄弟には4月30日を、アルフェウスの子で聖マタイの兄弟には10月9日を当て、別個に祝っている。聖書と教父たちは、ゼベタイの子ヤーカブと区別するために、「小ヤーカブ」ないし「年少のヤーカブ」と呼んでいる。主イエスの昇天の後、このヤーカブはエルサレムにとどまり、33年には既にこの聖なる都の初代司教となっていた。使徒たちのうちでも最も敬神に満ちた者とみなされ、真理に対する愛ゆえに「真の」という形容辞をつけて呼ばれることもある。彼は東方典礼の基礎をなすエルサレムの聖なる典礼をまとめあげた。ギリシア教会で、今日知られまた用いられている典礼は、ここから後に聖バズイルや金口の聖ヤーノシュが確立したものである。使徒的活動をより成功裏に進めるために、地方に散在して生活するユダヤ人たちに、教えの書簡をも認め、これは教会によって聖書のうちに収められている。62年にエルサレムにて殉教の死を遂げた。彼の聖なる典礼は、東方のきわめて著名な司教座聖堂では、今日でもなお主の親族の記念日、すなわちクリスマスの次の日曜日に執り行われる」。

さて「使徒行録」13.4～14.28には、パウロによる第1次宣教旅行（45—49年）が、そしてその後の「エルサレム使徒会議」（49年）の次第が記される（使徒15.1～35）。結局パウロはバルナバとは行動を別にするようになるが、パウロに付き従った者でシラスという人物が現れる。

○シラス（15.22—18.5） 7月30日

「聖スイラス、スイルワン、クレスケンス、エペネット、アンドロニク使徒、70

人のうち。シラスはパールの従者、実り多き使徒的活動の後、マケドニアにて十字架死」。

ここに現れる人名のうち、スイルワン（2コリ2.19；2テサ1）、クレスケンス、エペネト（ローマ16）、アンドロニクは「イエスの70人の弟子」と呼ばれるグループに含まれる。彼らについては後述する。

## 第6節 パウロ(2)

次いで「使徒行録」15.36～18.17には、パウロによる第2次宣教旅行（50—52年）が記される。

32) ○テモテ（16.1—3）（ティモート） 1月22日

「聖ティモート使徒。リカオニアのリストラにギリシア人の父、ユダヤ人の母のもとに生まれ、聖パールの弟子、その使徒的旅行の従者となり、後にエフェソスのキリスト教教会共同体の、ヤーノシュの後を受けた初代司教となった。彼からのちに全アジアの教会の管轄を引き受けた。97年に殉教」。

35) ○ディオニュシオス（17.34）（デーネシュ） 10月3日

「アレオパギタの聖デーネシュは、生まれはアテナイ人で、アレオパゴス評議会の一員である。50年ごろ聖パールがキリスト教に回心させ、後にアテナイ司教に叙階される。古い伝承では96年、同地にて殉教」。

さてパウロはコリント滞在中（18.1；50～52年）、同地に教会組織を整備したと思われ、それが後出の「第1・第2コリント書」成立の端緒となっているが、このときには、それ以前に滞在していたテサロニケ（17.11）の信徒たちに宛てて「第1テサロニケ書」「第2テサロニケ書」を認めている（51年秋～52年春）<sup>9</sup>。両書簡の冒頭には「シルワン、テモテ」の両名の名が現れるが、前者に関しては「70人の弟子」を参照。テモテについては先に紹介した（32）。

36) ○アクィラ（18.2；18）（アクィラース） 7月14日（cf. ローマ16；2テモテ4.19）

「聖アクィラ使徒は小アジアのポントス出身。52年にパールとコリントで遭遇、プリスキッラと夫婦。彼らの出自はユダヤ人。パールが彼らを回心させ、それ以降この偉大な使徒の忠実な援助者となった。アクィラは65年に没する」。

さらに「使徒行録」18.18～21.17には、パウロによる第3次宣教旅行（53—58年）が記される。

## 37) ○アポッロ (18.24—28) 11月22日

「聖フィレモン、アッフア、アルキップ、オネージム、マールク、アポッロー使徒。彼らは70人のうち。聖パールの弟子。フィレモンはフリギアのコロッセに裕福な貴族として生き、アッフアはその妻であった。アルキップはコロッセの司教、オネジウムはフィレモンの異教徒の奴隷であったが、フィレモンのもとよりローマに逃亡、そこでパールに出会い、キリスト教徒となり、聖パールが64年ごろフィレモンに宛てて認めた書簡を携えて戻る。彼ら全員を異教徒たちが78年ごろ石打ちにした」。

54年から57年にかけて、パウロはエフェソで3年間の活動・入獄を体験する(39)；19.1—40。「フィリピ書」(56—57年)は、従来はローマ獄中での書簡とされてきたが、近年ではこのエフェソスでの収監中とされる。同書簡に現れるクレメンス(4.3)、エパフロデイト(4.18)は、いずれも「70人の弟子」のうちに含まれる(第9節参照)。以下、この「フィリピ書」に現れる人名を見ておく。

## 39) ○エラスト(19.22；ローマ16.23；2テモ4.20)、オリンブ、ロディオン、ソシパテル、テルツイウス、クアルトゥス 11月10日

「聖エラスト、オリンブ、ロディオン、ソズィパーテル、テルツイウス、クアルトゥス使徒。聖エラストと同志、テルツイウス、クアルトゥスは70人のうち。オリンブとロディオンはペーテルの同志で、ローマで司牧に従事、66年にネロ帝により殉教。その他の者たちは各地の司教を務めたのち平和裡に死す。ソシパテルはイコニウムの、クアルトゥスはベリッススの、エラストはパニアドゥス(フィリポ・カイザリア)にちなんでこう呼ばれるが、コリントの、それぞれ執事であった」。

## ○アリストアルコス(19.29；20.4；27.2) 4月14日 (cf. フィレ24；コロサイ4.10)

「70人の弟子のうちなるアリストアルク、ブデス、トローフィム。ローマでも共にいる(27.2)。イエスの72人の弟子に属し、聖パールに従う者となる。ネロ帝のもと69年に殉教する」。

「第1コリント書」(56年)は、やはりこのエフェソスでの3年間におよぶ抑留期間に記されたと考えられる。この書簡の第16章には人名が頻出するが、その中にはやはり「イエスの70弟子」に含まれるものがある(16.17フォルト

ナートゥス、アカイクス)。さらにこのエフェソで、パウロは「ガラテア書」(56—57年)を記したと思われる。そして「第2コリント書」は57年夏あるいは秋、マケドニア(20.2)にて記されたとされる。さらにパウロはその途上、コリント滞在中に(cf.20.3)、「ローマ書」(58年)を著している。同書簡16章には多数の人名が挙がる。以下「ローマ書」に挙がる人物についてである。まずエパイネト(16.5)は「70人」の一人とされる(後述)。

40) ○アンドロニク(70)とユニア(ローマ書16.7) 5月17日 および  
2月22日

《5月17日》「聖パウルが親族また収監仲間として言及している。アンドロニクは70人の弟子の一人であり、彼はほとんど全土地を宣教者として経巡った。殉教の死によって神に栄光を帰した。その遺骸は、コンスタンティノポリスの郊外の一つ、エウゲーニウムに保管されていたが、時が経つにつれ失われてしまった。その再発見の記念は2月22日に行われる。」

《2月22日》「エウゲーニウムの聖なる殉教者たちの遺骸再発見。聖アンドロニクとユニアの遺骸は、トマス総主教とフォカス皇帝の時代にコンスタンティノポリスのエウゲーニウムという郊外にて、606—610年の間に発見された。この聖人たちの天上での誕生日は、われわれの教会では5月17日に記念される」。

○スタキス、アペレス、アンプリウス、オルバン、ナルキス、アリストブロ(ローマ書16.9) 10月31日

「聖スターキス、アペレス、アンプリウス、オルバーン、ナールツイス、アリストブル使徒たちは70人のうち。スターキスはビザンツの初代司教、彼を叙階したのはアンドラーシュである。後のこの皇都のキリスト教徒たちを16年間にわたり導いた。アペレスはヘラクレアの司教として没した。アンプリウスはアンドラーシュ自身が叙階し、オデッサの司教とした。オルバーンはマケドニアのある都市の司教であった。この二人は異教徒が殺した。ナールツイスはアテナイの司教として殉教の死を逃げた。アリストブルも司教であったがその都市名は知られていない」。

なお後記の「70人」の中では、アリストブロスは「ブリタンニア(?)の司教」とされている。

○ヘロディオン(ローマ書16.11)、アガブ、ルフス、アシンクリト(ローマ書16.14)、フレゴン、ヘルマス 4月8日

「ヘローディオン、アガブ、ルフス、アシンクリト、フレゴン、ヘルマ

ース。ヘロディオンは仲間たちはそれぞれ異なった場所で司教職を果たした。ヘロディオンは新パトラスで、ルフスはテーベにて、アシンクリトスはヒルカニアにて、フレゴンはマラトンにて、ヘルマースはダルマティアである」。

彼らは、いずれも「70人の弟子」のうちに含まれる。ここにはほかにトリファイナ、トリフォサ、ペルシス、パトロバ、フィロロゴとユリア、ネレウス、オリンパらの名が見えるが、このうちパトロバ、フィロロゴとオリンパは「70人」のうちに数えられよう（第9節参照）。

○ヘルミアース (70) (ローマ書16.14) 5月31日

「ヘルメアスは70人のうち。ローマ書に現れる」。

○ルキオ、ヤソン、ソシパテル (ローマ書16.21) 4月28日

「ヤソン、ソズィパーテル。ヤソンはイエスの最初の弟子に属す。キリキアのタルゾスに生まれ、のちに生まれ故郷の司教となった。ソシパテルはアカイアの生まれ。聖パールの弟子となり、のちにイコニウムの司教となった。彼ら二人とも後にケルキュラに赴き、そこのキリスト教の最初の布教者かつ殉教者となった」。

このほかテルティオ、ガイオ、エラスト、クアルトの言及があり、彼らは「70人」に含まれるものとして以下に考察する。

パウロはその後、コリントからフィリピ、トロアス、ミレトスを経て、カエサリアにおよび、そこでピリポと遭遇 (21.8; cf. 8.40ff.) する。その後エルサレムに帰還し (20.3—21.16) ヤコブに会う (21.18)。しかし当地にて捕縛され (21.17—23.35)、カイザリアでの拘置期間を経たのち (58—60年; 24—26)、ローマに移送されることになる (21.18—28.31; 58—60年)。

### 第7節 パウロ(3)

「使徒行録」21章以下は、パウロのローマへの旅の記述である。パウロはマルタ島を経てローマへ赴く (60—61年; 27.1—28.26)。先に挙げたアリストタルコス (27.2) はローマでもパウロの傍にいる。

パウロはローマでの軟禁期間中 (61—63年; 28.17—31)、いわゆる「獄中書簡」を認める。「フィレモン書」(63年)には、フィレモン、アフィア、アルキポ、オネシモ、カルボス、マルコといった人物への言及がある、11月22日 (アポッロ) および以下、また第9節を参照。

53) ○アルキポ 2月19日

「聖アルキブ、フィレモン、アッフイアス使徒たち。聖パールの弟子たちであり、書簡でも言及されている。フリギアのコロッセにおいて、ディアーナ女神の記念日に異教徒たちがキリスト教の聖堂になだれ込み、彼らを引きずり出し多くの拷問を加えたのち79年、彼らを殺害した」。

○オネシモ（コロサイ 4. 9；フィレ10, 12, 16） 2月15日

「聖オネズィム使徒は、聖フィレモン使徒の従僕であり、聖パールも「フィレモン書」の中で言及している。のちにティモテウスが彼を大使徒由来のエフェソスの司教に叙階した。縛られてローマに連行され、109年に石打ちにされた。のちにその遺骸はエフェソスに移送された」。

○ルカ（ルカーチ） 10月18日（コロサイ 4. 14, 2テモテ 4. 11, フィレ24）

「聖ルカーチ、使徒にして福音記者。70人の一人。アンティオキアの出身で医者、画家でもあった。聖パールより信仰教育を受けたのち、この偉大な使徒に常につき従った。主イエスの生涯と教えに関する事柄を丹念に研究し、救い主の生涯を、使徒たちの事績とともに、テオフィロスという名の友人で貴族のために書き記した。これは紀元後60年ごろのことである。これらの書はいずれも、神感を受けて記された書として、新約聖書のうちに収められている。86歳の生涯を生き、アンティオキアのパトラスの司教として平和裡に没した。伝承では、彼が最も古いマリアのイコンの画家であるとされている」。

このほかパウロは獄中書簡として「コロサイ書」（63年）および「エフェソ書」（63年）を著している。「コロサイ書」のなかではユスト（4. 11）、エパフラス、デマス、ニンファらの名が見える。彼らは70人の中に数えられうる。

## 第8節 パウロ(4)

「使徒行録」は、ローマで軟禁生活を送るパウロの記述で終わられている。しかしパウロは無事に釈放され、その後62年から63年にかけてスペインをめぐり、アカイアに戻ったとされる。さらに63年から64年にかけて最後の旅に出て、コリント、クレタ、エフェソス、トロアス、フィリピ、またテッサロニケ、ペレア、ニコポリスをめぐったと思われる。その後64年に再び捕えられ、ローマへと連行され、そこで処刑されることになる。

この間にパウロは「第1テモテ書」（65—66年）、「テトス書」（65—66年）、それに「第2テモテ書」（67年）を記している。「第1テモテ書」にはヒメナイ、アレクサンドロ（1テモテ 1. 20）の名が、また「テトス書」にはデマス、ク

レスケンス、ティキコ、カルボス、ルカ、マルコ、アレクサンドロ、またアルテマス、ティキコ、ゼナス、アポロ（テトス12以下）といった名が挙がる。彼らのうちには「70人」に含まれる者がある。

○テトス（ティトゥス、第2コリント書2ff） 8月25日

「聖ティトゥスは、生まれはギリシア人で異教徒である。聖パールの宣教における弟子そして助手である。彼はクレタの司教として残された。当地にて94歳で平和裡に没した」。

次に「第2テモテ書」（67年）に挙がる人物についてである。

○オネシフォロ（第2テモテ書1.16—18） 11月9日

「聖オネズィフォルとポルフィル殉教者。黒海沿岸のパリウスにて殉教した。伝承では、聖オネズィフォルは使徒たちの弟子であり、聖ポルフィルはオネズィフォルの従僕であるといわれる。聖パールもティモート宛て書簡の中で彼らについて言及している。彼らはハドリアヌス帝治下（76—138）に、まずは残虐にも鞭打たれ、次いで二頭の馬にくくりつけられた上で、その馬が別方向に駆り立てられたため、裂き殺された」。

○カルボス（70、第2テモテ書4.13）（カールプス） 5月26日

「聖カールプスは70人の弟子の一人。パールの協働者。トラキアのベリイの司教。トロアスで59年に殉教」。

またエウブロ、プデンス、リノス、クラウディアといった人名が4.21に挙がる。このうちプデス、リノスは「70人」のうちに数えられよう。またアリストタルコ、プデス、トロフィモに関しては、すでにアリストタルコスに関連して引いておいた。

パウロは、前述したように67年6月29日、ローマにてペトロと共に殉教したとされる。なお、現在の聖書学では通常パウロの作とはされないものに「ヘブライ書」がある。執筆年代から言えば「ヘブライ書」は66—67年の成立、少なくとも70年以前の成立とされ、ここにもテモテ（13.23；前出）の名が見える。

またパウロには聖書正典以外に聖書外典も伝わり、そこには女弟子テクラが現れる。テクラについては、ビザンティン典礼暦では9月24日を当てて記念している。

○テクラ 9月24日

「聖テクラ、使徒の同志、最初の殉教女。イコニアに生まれ、18歳のとき聖パールがキリスト教信仰へと教えを授け、後に彼女は自らもその熱心な布教者

となった。それゆえ彼女は実に多くの苦難を身に受けねばならなかった。多くの苦難と迫害のはざまに生きた生涯ののち、90歳で生まれ故郷にて没した。処刑されたわけではなかったが、彼女は多くの苦難を経たがために、教会は彼女を殉教者として崇敬し、女性として初の「殉教者」という名で記念している。

## 第9節 「イエスの70人の弟子」

さて、ギリシア・カトリック教会の聖人暦では、『ルカ福音書』第10章1節に見える「イエスの72弟子」に関して、1月4日を当ててその記念を執り行うことになっている。まず以下に挙げるのは、本稿でこれまで依拠してきた「メノロギオン」の記載である。

○70人の聖なる使徒の記念 1月4日

「70人の聖なる使徒」という名の下に、われわれはイエスの72人の弟子を記念する。われわれの書物が弟子たちの数を70人としているのは、あるいはある古い聖書の写本が「72人」ではなく「70人」の弟子となっているからとも、あるいは聖マーチャーシュと聖バルナバーシュの記念のためには別の記念日があるためとも言われる。それはともかくとして、72人の弟子の中で著名な者たちに関しては、大小のグループにおいて数度にわたり教会の年間において記念される。メーネアのスティヒラは、70人の弟子のうち64人の名を次のように挙げています。

1 クレオファース 2 アンドロニク 3 シルワーン 4 アガーヴ 5 アナニア  
アーシュ 6 フェリュプ 7 プロコル 8 ニカーノル 9 ルルス 10 ソステ  
ーン 11 リヌス 12 スターキス 13 イシュトヴァーン 14 ティモン 15 ヘルマ  
ース 16 フレゴン 17 マールク 18 ルカーチ 19 ソーゾイパーテル 20 ヤーソ  
ン 21 ガーユス 22 ティヒコス 23 フィレモン 24 ナールツイス 25 トローフ  
ィム 26 ツェーザール 27 ゼーノー 28 アリスタルク 29 マールク 30 スィラ  
ース 31 ガーユス 32 ヘルメス 33 アシンクリト 34 エラスト 35 ルカーチ  
36 オネズィフォル 37 カールプス 38 エヴォード 39 マーチャーシュ 40 ヤ  
ーカブ 41 オルバーン 42 アリストブル 43 ティヒコス 44 アリスタルク 45  
プデス 46 ヘロディオ 47 アルテマース 48 フィロログ 49 オリンプ 50  
ロディオ 51 アペッレス 52 アンプリアース 53 パトロバース 54 ティフォ  
ス 55 テルプノス 56 ターデー 57 エペネト 58 アカイク 59 アクイラース  
60 ルツイウス 61 バルナバース 62 フォルトゥナート 63 アポッロー 64 クレ

スケンス」

以上、ここには64人の名が挙がる。次に本稿冒頭に言及した「メネア」<sup>10</sup>から1月4日のスティヒラを参照してみると、両者は基本的に同様であるが、「メネア」での使徒の総数は67人となり、順序が少しく異なっている。相違点を挙げるならば、「メネア」では①20・21が22・23と入れ替わり、その後には挙げられている ②32—33が省かれ、その代わりに65アポッロー 66ケーファース 67ケレメン 68ユストゥス 69クワルトゥス という人名がここに挿入されている ③54が省かれている ④56と57の間に70ティトゥス が挿入されている

結果、3名分その数が増して総計は67名となり、「メノロギオン」から通算すると（通し番号のように）69名分の名が挙げられている。ただし17と29（マールク）、18と35（ルカーチ）、21と31（ガーユス）、22と43（ティヒコス）、28と44（アリストルク）、63と65（アポッロー）は同名人である。

次に「復活節暦日表」<sup>11</sup>に記載されている同様の「70人の使徒」のリストを参照すると、次のようになっている。

I マッティアス II ソステネス III ケファス IV リヌス V クレオフラス  
VI アクイラス VII エパイネトス VIII アンドロニコス IX アンブリアス  
X ウルバナス XI スタキュス XII アペッレス XIII ヘロディオン XIV  
アリストブロス XV ナルキッソス XVI ルフォス XVII アスュンクリトス  
XVIII フレゴン XIX ヘルマス XX パトロバス XXI ヘルメス XXIII  
フィロロゴス XXIII ネレウス XXIV オリュンピアス XXV ルキオス XXVI  
イアソン XXVII ソシパトロス XXVIII テルティオス XXIX ガイオス  
XXX エラストス XXXI ケアルトス XXXII アポッロス XXXIII ステファノ  
ス XXXIV フォルトウナトス XXXV アカイコス XXXVI テュキコス  
XXXVII クレメス XXXVIII エパフロデイトス XXXIX オネシモス XL  
アリストルコス XLI ユストス XLII デマス XLIII ニュンファス XLIV アル  
キッポス XLV オネシフォロス XLVI クレスケス XLVII エラストス  
XLVIII トロフィモス XLIX エウブーロス L プデス LI アルテマス LII  
テュキコス LIII ゼナス LIV フィレモン LV エパフラス LVI デマス  
LVII バルナバス LVIII マルコス LIX シラス LX ルカス LXI ティモテオ  
ス LXII シルワノス LXIII ティトス LXIV ステファノス LXV フィリッ  
ポス LXVI プロコロス LXVII ニカノル LXVIII ティモン LXIX パルメ  
ニオン LXX ニコラオス

以上である。「メノロギオン」と「メネア」によるリストと比較してみると、

①XXIII ネレウス XXVIII テルティオス XXXVIII エパフロデイトス  
XXXIX オネシモス XLII・LVI デマス XLIII ニュンファス XLIV アルキ  
ッポス XLIX エウブーロス LV エパフラス LXI ティモテオス LXIX パ  
ルメニオン LXX ニコラオスの計12 (13) 名分は「メノロギオン」「メネア」  
に挙げられていない人名である ②XXXとXLVIIはエラストス, XXXIIと  
LXIVはステファノス, XXXVIとLIIはテュキコス, XLIIとLVIはデマスで  
それぞれ同名 ということがわかる。

このほか、通常正教会で同日に祝われる「70人の弟子」のリストは次のよう  
になっている<sup>12</sup> (「正教会伝承」と略す)。

i ヤーカブ (主の兄弟, エルサレム初代司教) ii マルコス (福音史家) iii  
ルカス (福音史家) iv クレオファ (パス) v シュメオン (クレオパスの次子,  
エルサレム第2代司教) vi バルナバス (サラミナ (?) の司教) vii ユス  
トス (エレウテロポリスの司教) viii タッデウス (エデッサの人) ix アナ  
ニア (ダマスコの司教) x ステファノス (7助祭の一人, 最初の殉教者)  
xi フィリッポス (7助祭の一人, トラリアの司教) xii プロコロス (7助祭  
の一人, ニコメディアの司教) xiii ニカノル (7助祭の一人) xiv ティモ  
ン (7助祭の一人) xv パルメナズ (7助祭の一人) xvi ティモテオス (エ  
フェソスの司教) xvii テイトス (クレタの司教) xviii フィレモン (ガザ  
の司教) xix オネシモス xx エパフラス (アンドリアカの司教) xxi アル  
キッポス xxii シラス (コリントスの司教) xxiii シルワノス xxiv クレス  
ケス xxv クリスポス (ガリラヤのカルケドンの司教) xxvi エパイネトス  
(カルタゴの司教) xxvii アンドロニコス (パンノニアの司教) xxviii ス  
タキウス (ビザンティオンの司教) xxix アンブリアス (オデッサの司教)  
xxx ウルバナス (マケドニアの司教) xxxi ナルキッソス (アテナイの司  
教) xxxii アベッレス (ヘラクレイオンの司教) xxxiii アリストブロス (ブ  
リタニア (?) の司教) xxxiv ヘロディオン (パトラスの司教) xxxv ア  
ガブス (預言者) xxxvi ルフォス (テーバイの司教) xxxvii アスウンクリ  
トス (ヒュルカニアの司教) xxxviii フレゴン (マラトンの司教) xxxix  
ヘルメス (フィリポポリスの司教) xl パトロバス (ポットレの司教) xli  
ヘルマス (ダルマティアの司教) xlii リヌス (ローマ司教, 第2代教皇)  
xliv フィロロゴス (シノペの司教) xlv  
ルキオス (ラオディケイアの司教) xlvi イアソン (タルシスの司教) xlvii  
ソシパトロス (イコニオンの司教) xlviii オリエンピア (パ) ス xlix テル

ティオス (イコニオンの司教) l エラストス (パネアスの司教) li クアルトス (ベリュトスの司教) lii エウオドス (アンティオキアの司教) liii オネシフォロス (キュレネの司教) liv クレメス (サルディケの司教) lv ソステネス (コロフォンの司教) lvi アポッロス (カイサリアの司教) lvii テュキコス (コロフォンの司教) lviii エパフロデイトス lix カルポス (ペロエアの司教) lx クェドラトス lxi ヨハネ・マルコ lxii ゼナス (ディオスポリスの司教) lxiii アリスタルコス (アパメアの司教) lxiv プデス lxv トロフィモス lxvi マルコス (アポッローニアの司教) lxvii アルテマス (リストラの司教) lxviii アクイラス lxix フォルトウナトス lxx アカイコス

これに lxxi マーチャーシュが加わる場合があるほか、異同の可能性として、lxxii ステファノス lxxiii ロディオン lxxiv ケファス (イコニオンの司教) lxxv カイサル (デュラキオンの司教) lxxvi マルク (アポロニアス司教) lxxvii テュキコス (カルケドンの司教) が挙げられる場合があるという。

もとよりこの「70人の弟子」とは、伝説の域を出るものではありえまい。しかしながらビザンティン教会以外においても、福音書に見えるこの「イエスの弟子」、しかもいわゆる「12人使徒」以外のあり方での「弟子」の内実に関しては、早くから注目がなされていたように思われる。これら諸伝承をもとに、とりあえず「70人」の内実を決定することにしたい。

方法としては、「メノロギオン」・「メネア」のリストを基礎に、正教会からの伝承を尊重し、重複を省いて「70人」を決定する。その際、異同の可能性を加味した場合であっても、「メノロギオン」の記載をすくい取る方針を捨てない。

まず、オネシモ (XXXIX, xix) はメノロギオンそのものの中で「70人の一人」とされていたにもかかわらず、「メノロギオン」リストには含まれていない。したがって加えられるべきであり、まず70オネシモとする。またパルメニオン (パルメナース; LXIX, xv) は、使徒行録6.5に現れ7助祭の一人とされているがやはりリストから漏れているため、これを加えて71パルメナとしておく。しかし LXX ニコラオス は助祭のうち、後で道を外れた人物と考えられるため (黙示録2.15) 考慮しない。「メノロギオン」に2名分の記載があったマルク、ルカーチ、ゲーユス、ティヒコス、アリスタルク、アポッローについては、正教会伝承にも (異同のケースも含めて) 同様に2名分記されている場合、すなわちマルク、ティヒコスの場合を除いて一名分とする (71 - 4 = 67)。なお正教会伝承における異同のケースとして挙げられている lxxiii

ロディオンと lxxv カイサルは、いずれもメノロギオンに記載されている (lxxiv ケファスは「復活節暦日表」にも)。したがってこれらを捨てることはしない。一方「復活節暦日表」のリストは、たとえば XXIII ネレウスはローマ16.15, XXVIII テルティオスもローマ16.22, XXXVIII エパフロデイトスはフィリピ 2.25以下, XLII・LVI デマスはコロサイ 4.14ほか, XLIII ニュンファスもコロサイ 4.15, XLIV アルキッポスもコロサイ 4.17, XLIX エウブーロスは 2テモテ 4.21, LV エパフラスはコロサイ 1.7ほか, LXI テイモテオスはテモテ書 にそれぞれ挙げられている人名を加えており、聖書に登場する人物を編纂する格好で付加したという可能性も否定できないが、正教会伝承にも保持されているもの、すなわち XXVIII テルティオス (xliv), XXXVIII エパフロデイトス (lviii), XLIV アルキッポス (xxi), LV エパフラス (xx), LXI テイモテオス (xvi) の計5名分についてはこれを加える (67 + 5 = 72) のとし、ひとまず総計72名を「使徒」として、以下に総勢の一覧を掲げておく。もちろんこれは仮説に過ぎない。

なお、上記70人のうち「エデッサの人タッデウス」(56ターデー)は12使徒の一人タデとは別人であり、聖書には登場しないが、別個に祝日が設けられている。

○タッデウス 8月21日

「聖ターデー使徒はユダ・タデとは別人である。聖タデはエデッサでユダヤ人の両親から生まれた。若い頃エルサレムに来て主キリストと関わりを持ち、彼は72人の弟子のうちに加えられた。主の昇天の後郷里に戻り、エデッサ公アブガルを回心させて洗礼をも授けた。この公はイエスが重い病から癒した。メソポタミア、使徒的活動を殉教の栄冠で飾った」。

また lx のクアドラトスは、「メノロギオン」では9月21日に記念日が設けられている。そこには「使徒たちの弟子」とあり、70人に含まれるという記載はなく「メノロギオン」「メネア」における70人のリストにも入っていないが、記述事項を訳出しておく。

○クアドラトス (コンラード) 9月21日

「聖コンラード使徒は、使徒たちの弟子であり、2世紀の初めにアテナイの司教を勤めた教会著作家、信仰の傑出した擁護者であった。ハドリアヌス帝の時代に迫害を受け、マグネシアにて117年ごろ殉教の冠をかち得た」。

〔付；72弟子索引〕 「メノロギオン」での順番を冠して50音順に掲載し、

「メノロギオン」に掲載のないものは「復活祭暦日表」における番号を付した。「メノロギオン」のものはハンガリー語表記、それ以外はギリシア語表記である。

4 アガーヴ 58 アカイク 59 アクイラース 33 アシンクリト 5 アナニア  
 シュ 51 アベツレス 65 アポッロー 28 アリスタルク 42 アリストブル  
 XLIV アルキッポス 47 アルテマース 2 アンドロニク 52 アンブリアース  
 13 イシュトヴァーン 38 エヴォード LV エパフラス XXXVIII エパフロディ  
 トス 57 エベネト 34 エラスト 36 オネズィフォル XXXIX オネズィモ  
 49 オリンプ 41 オルバーン 21 ガーユス 37 カールプス lx クェドラトス  
 69 クワルトゥス 1 クレオファース 64 クレスケンス 66 ケーファース 67 ケ  
 レメン 3 シルワーン 30 スイラース 12 スターキス 27 ゼーノー (ゼーナ  
 ース) 19 ソーズィパーテル 10 ソステーン 56 ターデー 26 ツェーザール (カ  
 イサル) 70 テイトゥス 54 ティフォス LXI ティモテオス 14 ティモン 22  
 ティヒコス 43 ティヒコス 55 テルプノス 25 トローフィム 24 ナールツイス  
 8 ニカーノル 53 パトロバース 61 バルナバース LXIX パルメナース 23  
 フィレモン 48 フィロログ 62 フォルトゥナート 45 プデス 6 フェリュブ  
 16 フレゴン 7 プロコル 15 ヘルマース 32 ヘルメス 46 ヘロディオ  
 ン 39 マーチャーシュ 17 マールク 29 マールク 40 ヤーカブ 20 ヤーソン 68 エ  
 ストゥス 11 リヌス 18 ルカーチ 60 ルツイウス 9 ルフス 50 ロディオ  
 ン

## 第10節 結. 生きた伝承としての「メノロギオン」

ビザンティン教会の典礼暦典書である「メノロギオン」は、1年間のある日  
 をその人物のための記念日とし、その記憶を絶えず現在化し継承して未来へと  
 伝えるという性格を持つ。このことは、本稿で辿ってきたように旧・新約聖書  
 の主要な登場人物に関しても十分に実証しうることである。もちろん、学問的  
 ・科学的な聖書学の知見や研究成果に照らせば、はなはだ神話的に映る伝承も  
 多く含まれている。しかしながら、旧新約聖書を「知識」のレベルで捉えるこ  
 となく、日々の典礼とともに「生きる」ための糧とする上で、ここにはわれわれ  
 の気づかなかった貴重な伝承の宝が収められている。とくに「使徒」ひとり  
 ひとりに対しては、おそらく初代教会の信徒たちが抱いていたであろう、彼ら  
 への崇敬愛慕の念が伝わってくるほどにまで、詳細にその記憶を伝えている。  
 西方世界の『黄金伝説』<sup>13</sup>よりもさらに古い伝承を伝えるビザンティン典礼教

会の伝承を、今一度振り返ってみたい。

- 1 本稿では省略したギリシア・カトリック教会の史的・教義的概説は、拙稿「マーチャーシュ王とコルヴィナ文庫——15世紀ハンガリーの栄華——」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』47, 1—21頁, 2005年3月, あるいは「聖バジル典礼における奉獻文の神学的地平——ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』解釈に向けて——」, 『エイコーン——東方キリスト教研究——』第34号44—64頁, 新世社, 2006年12月, および「伝承と国際性——ハンガリーのギリシア・カトリック教会——」, 筑波大学比較文化学類『比較文化研究』第3号26—36頁, 2007年3月などを参照。
- 2 年間を通じてのカレンダーは、近刊拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会——伝承と展望——』（創文社）に収録する。
- 3 *MÉNOLOGION*, I. (Szeptember 1-Oktober 2), II. (Oktober 3-November 20), III. (November 21-December 17), IV. (December 18-31), V. (Január 1-27), VI. (Január 28-Március 10), VII. (Március 11-Április 30), VIII. (Május 1-Junius 27), IX. (Junius 28-Augusztus 5), X. (Augusztus 6-31), A., "Dicsérvétek az Úr nevét" című zsolozsmakönyv tartozéka, Miskolc 1939.
- 4 *MÉNEA I.* : *Szeptember-Oktober*, A fordítást a Rómában 1888-ban görögül kiadott MÉNAIA I. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2002; *MÉNEA II.* : *November-December*, Rohály Ferenc kéziratot fordításának átdolgozott kiadása, Nyíregyháza 1998; *MÉNEA III.* : *Január-Február*, A fordítást a Rómában 1896-ban görögül kiadott MÉNAIA III. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz L. Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2005; *MÉNEA IV.* : *Március-Április*, A fordítást a Rómában 1898-ban görögül kiadott MÉNAIA IV. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2006.
- 5 *Dicsérvétek az Úr nevét: Görög katolikus ima és énekeskönyv*, Nyíregyháza 1993.
- 6 *Görög katolikus liturgikus naptár* (2004, 2005, 2006, 2007), Örökségünk Kiadó, Nyíregyháza ("Npt").
- 7 Ivancsó István, *Görög katolikus liturgia*, Nyíregyháza 1999; *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza 2000 ("Iv").
- 8 以下の分類は、便宜的に土戸清『私たちの「使徒行伝」』（新教出版社, 増補改訂版2001年）の小見出しを参考にした。
- 9 各パウロ書簡の成立年代に関しては、基本的にフランシスコ会聖書研究所訳注『新約聖書』（中央出版社, 改訂版1984年）に従った。
- 10 *MÉNEA III.* : *Január-Február*, A fordítást a Rómában 1896-ban görögül kiadott MÉNAIA III. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz L. Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2005, 60.

- 11 L. Dindorf (ed.), *Chronicon Paschale : ad exemplar Vaticanum* (Corpus scriptorum historiae Byzantinae v.16-17), 400ff., Ann Arbor, 1832. 「復活祭暦日表」に関しては、J. フィルハウス「ビザンティン帝国における歴史記述」(上智大学中世思想研究所編『中世における歴史記述』181—207頁所収, 創文社, 1995年), 193頁.
- 12 “Seventy Disciples”, in : Wikipedia, the free encyclopedia, [http://en.wikipedia.org/wiki/Seventy\\_Disciples](http://en.wikipedia.org/wiki/Seventy_Disciples)
- 13 ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』(1～4, 前田敬作他訳), 平凡社ライブラリー2006年.